

韓国国立古宮博物館の特別展示「笠子帽（カッ）を被りアメリカに渡った朝鮮外交官の物語」をみて

李 穂枝

Report of the Exhibition of 「Diplomats in *Gat*: The Story of the Joseon Legation in Washington D.C.」

LEE Suji

0. はじめに

2022年10月14日から12月13日まで、韓国ソウルにある国立古宮博物館の企画展示室で、「笠子帽（カッ）を被りアメリカに渡った朝鮮外交官の物語」という特別展が開かれた。1882年、朝鮮は西洋国家の中で初めて米国と国交を結んだので、2022年は韓米修交140周年にあたり、これを契機として『美國公私往復随録』『美國書簡』（国立古宮博物館所蔵）が国家登録文化財に登録された。これらは朝鮮初代の駐米全権公使朴定陽（パク・ジョンヤン）に随行した公使館員李商在（イ・サンジェ、1888～1889年）等が駐米公使業務のために必要な参考事項を記した便覧あるいは備忘録である。本展示は、これを記念して初代駐米公使館員の外交活動を紹介するものとして特別に企画されたのである。

筆者は10月30日、ソウル景福宮（キョンボククン）内にある国立古宮博物館を訪れた。金浦空港から古宮博物館のある景福宮までは電車で移動でき、約1時間程度かかる。古宮博物館は朝鮮王朝専門博物館で、朝鮮王朝と大韓帝国の歴史と文化、生活を紹介している。常設展示室は地下1階から2階まで7つの展示室で構成されており、1・2階に企画展示室が設けられている。入場料は無料で、特別展示もすべて無料で見ることができた。そして、図録も無料でダウンロードできるようになっており、大変幸便である。

1. 展示会のあれこれ

筆者はまず、現在の研究テーマである大韓帝国の展示室を見学してから、企画展示室に向かった。下の写真は展示室の入口の様子である。壁一面に左のように今回の展示会のタイトルが書かれており、一歩進むと、右の写真のように公使館で執務中の朝鮮人の影を描いたものがあった。



図1 特別展示室入口の壁（韓国ソウルの国立古宮博物館）

展示は1882年に朝米修好通商条約が調印された時から大韓帝国の時期までを扱っていた。米国の条約締結を契機に翌年の1883年、朝鮮初の朝米外交使節である報聘使が米国に派遣された。それから4年後の1887年、朝鮮は自主国家であることを知らせるために朴定陽を初代駐米全権公使に任命、米国に派遣する。清の干渉で「另約三端」の遵守を条件にすることとなるが、以後朴はこれを守らず単独で行動したため、後に清からの非難と抗議を呼び起こしたことは朝鮮近代史では有名な事件である。

結局、朴定陽は清の圧力で帰国することにはなったが、その後も駐米公使館は大韓帝国が日本によって外交権を剥奪される1905年までの16年間、外交活動を展開した。

展示室には米国に渡った使節団の写真、英字新聞の報道記事、当時の駐米公使館の図面と写真などが展示されていた。また、展示室の真ん中には駐米公使館の執務室を再現したような空間をつくり、その中に国家登録文化財となった2点の史料およびその他の主要史料を紹介していた。中には朴が朝鮮に派遣されていた米国人の軍事教官ジョン・リー (Jones G. Lee) 宛に送った安否の手紙もあった。さらに、朴一行がジョージ・ワシントンの自宅を訪れた際に撮影された写真も展示されていたが、この写真は筆者の興味を引くものであった¹。道袍(通常の礼服)に笠(カッ)をかぶった姿は西洋人の間で間違いなく目立ち、いくつかの英字新聞の記事で書かれていたように、彼らが一種の見せ物になったことが推察できる。写真で駐米公使館書記官の李夏榮(イ・ハヨン)が、ある西洋人男女の間に立って婦人の子供と見られる幼い子供の手

韓国国立古宮博物館の特別展示「笠子帽（カッ）を被りアメリカに渡った朝鮮外交官の物語」をみて握っているような姿で写ったのは印象的だった。

このように写真資料に関しては、これまで接したことのない写真も見ることができて興味深かった。特に1883年の閔泳翊（ミン・ヨンイク）報聘使一行と1887年の朴定陽駐米公使館員一行を撮った2枚の写真は以前から様々な本で紹介されていたが、最新技術を用いて人物の瞳が点滅したり首が揺れたりして躍動感があり、140年前の彼らから声をかけられているような印象を受けた。

筆者の現在の研究テーマである大韓帝国期前後の関連資料としては、「駐美來去案」という奎章閣韓国学研究院が所蔵している資料が展示された。この「駐美來去案」は、展示図録の説明によると、「1895年11月の徐光範（ソ・クァンボム）公使在任期から1905年の乙巳条約（第二次日韓協約）で公使館を離れることになった金潤晶（キム・ユンジョン）代理公使在任期まで、駐米公使館と朝鮮および大韓帝国外部との間でやり取りした公文書を集めた本」だという。主な内容は「米国との対外関係よりは公使館運営に関する」もので、たとえば現地官員の俸給や駐米公使交替時の印鑑の交替などが記録されているようである。公使館の実務を把握するうえで重要な史料だと言えよう。ただし、1895年は大韓帝国成立のわずか2年前であり、当時朝鮮では米国だけでなく日本、ロシア、英国、ドイツ、フランス勢力が交差していた。大韓帝国が成立する前後に米国ではどのような外交が展開していたかは、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

2. 英字新聞のなかの駐米公使館員

今回の展示で最も興味深かったのは、駐米公使館員とその家族に関連する英字新聞の報道であった。使節団が米国に登場した際に、真っ先に世間の注目を集めたのは、彼らの服装だった。笠をかぶって道袍を着た彼らは、どこに行っても人々の視線を一身に受け、各所の写真館の業者たちはこの使節の写真を撮ろうとした。朴定陽は米国における活動や見聞した内容を記録に残しているが、その一つに『美行日記』というものがある。丁亥（1887）年12月18日付『美行日記』には写真館に行って写真を撮ったという記録が出てくる（西暦1888年1月30日）。今回の展示にはまさにこの日に撮影されたと推測される写真が展示されていた。展示会の説明にも、公使館員だけでなく随行員まで一緒に写真を撮ったという日記の記録から見て、この写真がその時撮った写真であると書かれていた。

服装への興味関心は英字新聞の記事に何度も表れており、やがてこの朝鮮人たちが洋服に着替え、洋風のスタイルに馴染んでいったということも記事に書かれていた。新聞ではそのような変化を肯定的に評価しているようだった。以下、今回の展示で見た新聞記事のなかでいくつか紹介する。なお、日本語訳や下線はすべて筆者による。

まず1893年7月の『Demorest' Family Magazine, U.S.』の記事の一部である。

The Oriental legation most recently established in Washington is that representative of the Kingdom of Great Chosun, a Korean envoy having been first regularly accredited

to the United States about five years ago. Although the Koreans are the newest arrivals, in spite of their extreme conservatism they have seemingly been the readiest to assimilate our ideas of civilization. When the Korean minister and his suite, garbed in their native dress, first made their appearance in the streets of Washington, they were objects of the most unbounded curiosity. Even in a city where Oriental costuming was no unusual thing, these bland-faced little men, who are distinctly Mongolian, but of a type hitherto unknown, attracted universal interest. They wore fluttering silken garments of delicate hues—pale blues, apple greens, pinks, purples, and yellows—in the most startling combinations, while on their heads were perched their indescribable horse-hair hats, demurely tied under their olive chins with narrow black ribbons. Within a very short time after their arrival, however, a most surprising change came over them; and now the members of the Korean legation are so thoroughly Americanized that it is difficult to distinguish them by a merely casual glance.

(日本語訳) ワシントンで最近設立された東洋公使館は、朝鮮の公使館である。朝鮮の使節は約5年前に初めて米国に正式に公使として派遣された。朝鮮人は一番最近到着した人たちが、彼らの極端な保守主義にもかかわらず、我々の文明の考え方を最も早く吸収したように思われる。朝鮮の公使とその一行が民族衣装をまとって初めてワシントンの街に現れたとき、彼らは限りない好奇心の対象となった。東洋の衣装が珍しくもないこの街でさえ、このあどけない顔の小男たちは、明らかにモンゴル人でありながら、これまで知られていなかったタイプで、人々の関心を集めた。彼らは、淡いブルー、アップルグリーン、ピンク、パープル、イエローといった繊細な色調の絹のひらひらした服を、最も驚くべき組み合わせで身にまとっていた。頭には何とも言えない馬毛の帽子をかぶり、細い黒いリボンで控えめにオリーブ色のあごの下に結んでいる。しかし、到着して間もなく、彼らは驚くべき変化を遂げた。今や朝鮮の公使館員は徹底的にアメリカナイズされており、ちょっと見ただけでは見分けがつかないほどである。

1897年「The PURITAN」の記事には、朝鮮の笠(カッ)を fly screen hat (防虫ネット帽子)と表現している。

During the administration of President Arthur, the United States concluded treaties with this exclusive people. Commercial intercourse was established, and soon thereafter a Korean or two appeared on the streets of our national capital, attracting notice by their fly screen hats and quaint padded garments. When the Koreans came, the Chinese and Japanese lost much of their novelty to the sightseers in Washington. Men and women, ordinarily well behaved, craned their necks and tiptoed at public receptions in order to catch a glimpse of the newcomers in the diplomatic corps; and the grave Koreans excited as much wonder and amusement as the bushy headed Zulus

韓国国立古宮博物館の特別展示「笠子帽（カッ）を被りアメリカに渡った朝鮮外交官の物語」をみて

in a circus parade.

（日本語訳）アーサー大統領の時代に、アメリカはこの排他的な人々と条約を締結した。商業的な交流が確立され、その後すぐに、1人か2人のコリアンが首都の通りに現れ、その防虫ネット帽と古風で趣のある衣服で注目を浴びた。朝鮮人が来たとき、中国人と日本人は、ワシントンの観光客に彼らの目新しさの多くを失った。普段は行儀の良い人々でも、外交団の新参者を一目見ようと、公的なレセプションでは首をかしげたりつま先立ちをしたりした。重々しい雰囲気の朝鮮人たちは、サーカスのパレードでぼさぼさした頭のズール人と同じくらい驚きと楽しみを与えてくれた。

また、1900年2月4日付『New York Daily Tribune』の記事にも展示のタイトルにもある「笠子帽（カッ）」(their curious hats) について言及しており、自主外交を展開しようとした朝鮮側の試みについても指摘されている。

New Corea began with the treaty of 1882, when the doors of the Hermit Kingdom were opened, slowly and cautiously, to the new world. Six years later the first Korean Legation came to Washington. It saw to throw off the grasp of her powerful neighbor, China, that Corea sought the friendship of the United States. Early in January 1888, the Minister, Pak Chung Yang, accompanied by a retinue of secretaries and attaches, presented his credentials to the President. Their dress, neither Chinese nor Japanese, and, above all, their curious hats, made them conspicuous figures everywhere. Their gentleness and simplicity and the fact that their Government had turned to this country for support in asserting independence of China, won the good will of official circles. (下略)

（日本語訳）新しい朝鮮は隠者の王国の扉がゆっくりと、そして慎重に新世界に開かれた1882年の条約で始まった。6年後、最初の朝鮮公使館員たちがワシントンにやって来た。中国という強大な隣国から逃れるために、朝鮮はアメリカとの友好関係を模索した。1888年1月の初め、朴定陽公使は、秘書官と随行員を伴って、大統領に信任状を提出した。彼らの服装は中国風でも日本風でもなく、何よりも奇妙な帽子は、どこでも彼らを目立つ存在にした。彼らの優しさと素朴さ、そして中国からの独立を主張するためにこの国に支援を求めたという事実が、官界の好感を得たのである。

最後に公使館の婦人たちを比較した雑誌記事があったので紹介したい。『The Home Magazine』1891年5月号の記事である。ある公演で、中国の公使婦人と秘書館の婦人等女性たちが一つのボックスシートを使い、公使館の紳士たちは隣の別のボックスシートに座っていた。その向かいに朝鮮人が座ったが、朝鮮人の公使一行は夫婦で同じボックスシートを使い、「女性の自由において中国より自国が進んでいることを示した」(opposite them sat the Koreans, but these gentlemen occupied the same box with their wives, indicating the

advance of their country over China in freedom for women.) と記事には書かれている。続いて、次のように朝鮮と中国の婦人たちを比較しているが、大変興味深かった。

The social customs of the two nations are so different that while the Korean ladies showed animation of a very guarded kind, occasionally, however, laughing heartily at the jokes and tricks of the performers, the face of the Chinese ladies never changed from the beginning to the end. Although they were all enjoying a great social event in their lives, there was no interchange of smiles or visits from the boxes, and when the performance was over, all entered their carriages and were driven off without a word having passed between the ladies.

(日本語訳) 両国の社交習慣は非常に異なっており、朝鮮の婦人は非常に慎重な活気を見せ、しかし時折、芸人の冗談やトリックに大笑いするのに対して、中国の婦人の顔は最初から最後まで変わることがなかった。彼女たちは人生の一大イベントを楽しんでいるにもかかわらず、笑顔を交わしたりお互いのボックスシートを訪問することもなく、公演が終わると全員が馬車に乗り込み、彼女たちの間で一言も交わさずに走り去った。

遠い異郷の見慣れないところで、異なる環境と文化の中に置かれた駐米公使館員とその家族たちについて、当時の写真や英字新聞の記録を通して彼らの生活の一端を垣間見ることができた。また、西洋人の目に東アジアの国々がどのように映っていたのか、この時期の東アジア三国関係や外交関係を理解する上である種のヒントになる可能性を感じるに至った。

今後は、米国にある駐米公使館の建物を直接訪問し、今回の知見をもとに当時の資料に直接アクセスしてさらなる理解につなげていきたいと考える。

註

*この調査研究は JSPS 科研費 JP21K13249 の助成を受けた研究成果の一部である。

¹ ネットで閲覧できる。

<http://catalog.mountvernon.org/digital/collection/p16829coll31/id/286/rec/23>

引用文献

朴定陽『美行日記』(푸른역사, 2015)

국립고궁박물관『갓 쓰고 米國에 公使 갓든 이약이』(2022) 電子版図録